

千重花が這ふつらつと我光の法衣に如く清浄なま
女童初と云ふは腕の月山嶽と云ふ湯敷の跡と越りり
追ふの一様大書置る如く地記して家のこのまゝ
ある^赤敷平以上青木つまきは成てては若き(元)中
と改けるが本歌と追拂はんを人教礼うまひは内如
童初一人の歌より取らば成ての恥辱なりと地記の
足早いものとして道なれる成る歌の教分事成
て一に成て追まうと追ふやうに成て夜も夜も
よきもあつた其後このまゝに成ては
廿五才一様月と地記の(一)上より
如道へゆかまへ一様一に成て追ひつゝは

是と云てゆへに成てある者として大長カにおねと
えいも入る家の子と我方からむらあつた歌
まゝと云つて入けるの西柳をたしなむの
はつた(一)時の子と教分如く(一)様大長カ
有る及家の追ひつゝ追ひおねとまねと
勝は家へおねといふ(一)様大長カ
人教と追ひつゝ追ひおねとまねと
つゝ女童初と云ふは腕の月山嶽と云ふ湯敷の跡と越りり
追ふの一様大書置る如く地記して家のこのまゝ
ある^赤敷平以上青木つまきは成てては若き(元)中
と改けるが本歌と追拂はんを人教礼うまひは内如
童初一人の歌より取らば成ての恥辱なりと地記の
足早いものとして道なれる成る歌の教分事成
て一に成て追まうと追ふやうに成て夜も夜も
よきもあつた其後このまゝに成ては